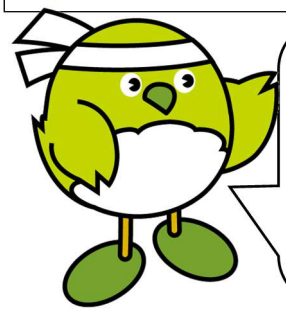
Q18 意欲を持って取り組めるようにするには、どのようにすればよいか分かりません。

Ａ なぜ、何のために学習しているのかを児童生徒が意識できるようにすると共に、「できた」で終わるようにし、褒めて意欲を高めましょう。

自立活動は苦手なこと（課題）を取り上げることが多いため、意欲も持ちにくいケースも見られます。なぜ、何のために学習をしているのか、学習の目的や目標を自覚できるようにすることで、本人の主体性が増し、学習への意欲が高まります。そのためには、実際生活とつながった教材や学習活動にすること（Ｑ16、Ｑ17 参照）の他、毎時間のめあてやその題材（単元）の目標、テーマを提示する、めあては自分で決める・考える等の工夫も考えられます。

「できた」で終わるためには二つの視点があります。一つ目の視点は、達成できるめあてを設定することです。例えば、「スケジュールに沿って活動しよう」というめあてでは１学期間や１年間かかるような目標で、到底１時間では到達できません。しかし、「一つの活動を最後までしよう」「一つの活動が終わったら、スケジュール表を見よう」「スケジュール表を見て、取ったカードの活動に取りかかろう」等と、細分化すると、その時間に達成できるめあてになります。このように、目標、内容を分析して、細分化し、到達できるめあてを設定します。もう一つの視点は、場面設定や教具を工夫したり、教師の支援を段階化したりして、達成できる状況を作ることです。例えば、手指の巧緻性を高めるためにストローをひもに通してのれんを作る活動を設定した場合、始めは太いストローや糸から始め、徐々に細いものにしたり、ガイドを付けて必ず通せる教具を用意し、徐々にガイドを小さくして支援を減らしていったりすること等が考えられます。

大切なことは、教師が褒めることです。本人が取り組もうとした、考える様子が見られた、少しできるようになった等、些細な動きやわずかな進歩、変化を見逃さず、褒めます。その際、「即時強化」という言葉がありますが、その行動がみられたときに、すかさず褒めることが肝要です。



褒めることは、自己肯定感を高めるための有用な方法です。障がいのある児童生徒は、幼少期より失敗経験を重ねていることが多く、自己肯定感が下がっている場合があります。特別支援学級、通級指導教室の担任・担当者は「褒め上手」な先生になってください。